

# Epistula



大分県立芸術文化短期大学  
2012. Spring

エピストゥラ... epistula,ae,f. 手紙、文章【ラテン語】

## 音楽科特集号

### 創立50周年 第47回定期演奏会



平成23年10月10日、3:00の総合文化センター3:00のグラウンシアタにて創立50周年記念行事の一環として第47回定期演奏会を行いました。

演奏曲目は、ラヴェル作曲「ダフニスとクロエ」第2組曲、ベートーヴェン作曲交響曲第九番「短調作品125」合唱付きで、今回指揮者に読売日本交響楽団正指揮者の下野竜也氏、そして本学卒業後アメリカを中心に世界的に活躍されているソプラノの木下美穂子氏、同じく本学卒業後日本を代表するバスとして活躍されている伊藤純氏を招いて、本学教員のアルトの愛甲久美准教授、テノールの行天祥晃准教授も加わり、盛大に行いました。オーケストラは、在学生63名と本学の卒業生20名、教員7名、九州圏内で活躍する客演6名で編成された大分県立芸術文化短期大学管弦楽団、合唱は、音楽コースを中心とした合唱団に男性合唱「大分第九を歌う会」から78名が賛助出演しました。尚、合唱指導は、宮本修教授、森口真司准教授が担当しました。

また今回は、3月の東日本震災に遭われて大分県へ避難を余儀なくされている方々へ県庁を通じて周知し、数人の方々が来場されました。そして開演に先立ち、亡くなられた方々、そして行方不明の方々に全員で黙祷を捧げ、追悼の意を表しました。

学生の皆さんは、オーケストラ特講や直前集中練習に加えて、合唱練習やパート別分奏など、授業以外の時間にも自発的に練習に取り組みました。練習は、音楽棟の小ホールだけで無く学生食堂も使用しなければならず、そのたびに、学食のテーブル・イスを片付けてスペースを作り、音楽棟から打楽器・チェレスタ等の大きな楽器、譜面台、指揮台等運び込んだり、大変な労力をみんなで協力しながら行いました。それでも合唱団とオーケストラのメンバーが揃って学生食堂も十分なスペースが取れず、窮屈な思いをしながらの練習でしたが、そうした皆の努力の継続が、熱意にあふれた演奏を生み出したことは言うまでもありません。

客演ソリストの木下美穂子、伊藤純氏お二人には前日夕方から参加して頂き、特にニューヨーク在住の木下美穂子氏はアメリカから来日して参加して頂きました。

演奏会本番では、指揮者のパトロンに付いていこう、作曲家の意図を反映させようと一杯の演奏が行われ、約1000名の聴衆との一体感がホールに満々と広がり、客席からは大きな拍手を持って受け入れられました。ステージ上で努力の成果を披露できた学生たちの満足な表情も感慨深いものでした。

プログラムの曲目解説は、小川伊作教授と、専攻科音楽専攻理論コースの学生が受け持ち、理論を研究する学生たちの知識を記述し、表現するよい機会となりました。

終演後には、ホールロビーにてレセプションが行われ、指揮者・独唱者・合唱・オーケストラ楽員が参加し、スタッフと共に大きな成果を生み出したことに安堵と喜びを分かち合いました。こうして、音楽を通じて皆が得た大きな充足感、何ものにもかえがたい貴重な経験として、当日の聴衆の方々への感謝とともに、演奏会にかかわったすべての人の心に残ることを思います。

### 定期演奏会 出演学生の声

- 私にとって一生忘れることのできない貴重な経験でした。
- ソリストの先生方のあまりに素晴らしい歌声に圧倒されました。
- 本番で歌いきったときは、思わず涙が出そうになりました。
- 本当に楽しくて心に残る演奏会でした。
- 芸短でよかったと心から思うことができました。
- 将来はソリストとして芸短に帰ってきたいと思えます。
- 下野先生の指揮に感動しました。
- 下野先生が着ているTシャツのロゴがとてもおもしろかったです。
- 芸短メンバーでもういちど第九を歌いたい。
- ダフニスの早いところの指とタンギングがむづかしかった。
- ダフニスは映像があらわれるようでした。(美術科)
- 圧巻、ただその一言だった。(情報コミュニケーション学科)
- 本番前日は全然眠れませんでした。
- ソロの練習を一日50回吹きました。
- 音楽の深いところまで考え、演奏するようになった。
- 自分自身とても成長した。
- 音楽への関心、知識、技術が深まって、意義のある時間をすごすことができた。

### 宮本修 退官記念「冬の旅」独唱会



本学で長年勤められ声楽コース、音楽科大学の教育に多大な貢献を残された宮本修教授が、退官される最後の年にライブワークであるシューベルト「冬の旅」全曲のコンサートをグラウンシアタで開き、多くの聴衆に深い感銘を与えられました。以下は先生ご自身にお書きいただいた「音楽や「冬の旅」に関する思いです。

「へたに演奏家を目指すな、お前は先生に向いていない。九州に帰り、声の原石を探し出して、東京へ送れ。あとは俺がめんどう見る。」大分県出身、生前日本を代表するバリトン歌手と称され、現在の東京二期会を創設された恩師中山悌先生の言葉の導きに促され、大分に戻ってきて36年目の昨年秋、11月30日(水)退官記念「冬の旅」独唱会を持たせていただきました。中山先生は「冬の旅」は生歌が続ける芸術歌曲の基本がすべての中にある。その時は分からなくても、歌う度に、その都度見えてくるものがある。余計な色気は出さず。お前には基本をたたき込んだから、どんなことがあろうと歌うことを止めるな、必ず歌い続ける。」

私は「冬の旅」終曲、第24番「辻音楽師」(ライエルマン)を歌いながら、感慨ひとしおでした。その老音楽師の回りには誰ひとりとして彼の歌を聴いてくれるものがないのに、ライエルマンは淡々と歌い続けているのです。何故歌うのか?何故歌わねばならぬのか?問う事も拒絶して、ただ無心に歌っているのです。そう、歌い続けることは生きるということなのだということ。中山先生は私にとって、辻音楽師そのものであったのです。この歳を経て今、芸術の持つ大いなる意味を分かって戴いた退官演奏会でした。



Vita brevis, Ars longae(生命は短し、それと芸術は永遠である。)

ピアノの小林道夫先生、日本語字幕を担当して下さった愛甲先生、行天先生、当日、会場受付等、裏方スタッフ役を受け持った下さった音楽科の全教員、副手の皆様、大学事務局職員の方々、本当に有り難うございました。心より感謝申し上げます。

宮本修

### 学長コラム 心に響く歌



似顔絵/柳野 郁子 (専攻科 造形専攻1年)

音楽は、人の生活にはなくてはならないものです。楽しいにつけ、悲しいにつけ、音楽が耳に入ることで感情がますます高まって来るのは誰もが経験することだと思います。中でも歌の持つ力は格別です。

私が東京二期会で仕事を始めた頃、近郊の町で、6、7名の歌手による小さなコンサートを開いたことがあります。お客様は全員がご老人達で、歌ったのはわらわ歌や小学唱歌でしたが、終わった後に会場を後にする皆さんが目には涙を浮かべていました。感想文にはその歌の数々が如何に心を打ったかという文章で埋め尽くされており、歌は、それを聴く人の心の奥に眠っている様々な記憶を解き放つてあふれ出させる力を持っていると改めて確信しました。

最近、中高年の人達が、厳しい仕事の合間に、若い頃歌ったフォークソングやバンドを再開したり、当時人気だった歌手達のライブやアルバム公演に大勢集まるシーンがテレビで紹介されるようになりました。みんな夢中で歌を歌い踊っているのを見ると、歌の種類は問わないのではないかとさえ思います。

本学で学ぶ若い人達にとっての思い出の曲は、どんな歌だろうかと考えて見ましたが、子どもの頃お母さんから聴いた歌が、高校までの音楽の時間に習った歌が、人気グループの歌が、それともテレビから流れてきた「モーシャールヤ」番組のテーマ音楽が、あまりにも多くの歌があつてちょっと想像がつかません。それくらい沢山のメロディーが世の中にあふれています。

やはり歌の流行は短いです。年齢が少し違えば感じる歌も違うということになるのかも知れませんが、少なくとも私がくつと来る歌とは随分違つたろうなあと思いを巡らせると、少なくとも明治期から私が育った頃まで連続として歌い継がれてきた小学唱歌のような共通の歌は、今はもうないのかなあと少し心細くなるのです。皆さん如何ですか?